

坂本クンと行く川巡り 第2回 Go! Go! 109水系

山懐に抱かれた 米代川 (秋田県)

川系男子 坂本貴啓さんの案内で、編集部の面々が109水系を巡り、川と人のかかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載です。



109水系
1964年 (昭和39) に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」(河川法第4条第1項)を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

【米代川流域の地図】
国土地理院基盤地図情報(縮尺レベル25000)「秋田、青森、岩手」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ (平成19年)、流域メッシュデータ (平成21年)、ダムデータ (平成17年)、空港データ (平成24年)、世界自然遺産データ (平成23年)」より編集部で作図
この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。(承認番号 平25情使、第479号)

米代川の由来
米のとぎ汁が川下まで流れていって、真っ白になるほどだった、というのが米代川の由来。
そのとぎ汁は、だんぶり長者の家から流れ出したものです。だんぶりというのはトンボのこと。夢でトンボに教えられた不思議なお酒のお蔭で長者になり、その家から川を染めるほどの米のとぎ汁が出た、という話です。

米代川河川敷。尾去沢（おさりざわ）の鉱石を荷揚げしていた二ツ井の（荷揚場）辺り。先日の豪雨も上がり、レンタルサイクルで疾走する坂本くん。右の図は、船着き場とダム、鉱山、滝をプロットしたもの。山がちな米代川に多く存在する滝は、水力発電の適地。また船着き場は、山からの恵みである鉱石や秋田杉を運んだ歴史の証人でもある。



川巡りの醍醐味は、人との出会い

川巡りをするとき、まず現地の河川事務所を訪れるようにしています。ここには治水や利水の話はもちろん、その川にかかわるNPOの方々の活動など、たくさん情報が集積しているからです。所属する白川研究室の3年前(2010年(平成22))のゼミ合宿のときには、国土交通省能代河川国道事務所と森吉山ダム工事事務所(当時)にご連絡しました。昨年(2012年(平成24))の4月から運用が開始された森吉山ダムは、訪問時は試験湛水中。対応してくださった笹木綱彦さんが、「他所から来た人が米代川に興味を持ってくれるのはうれしい」と親身になって協力してくれました。

笹木さんがたまたま「ヘカヌーシ1ダ秋田」という組織に所属していたので、秋田杉で会員の方が自作したカヌーに乗れるように手配してくれました。

また、二ツ井町郷土史研究会会長で「へきままち観光ガイドの会」の顧問を務める伊藤徳治さんともつながり、岳岱自然観察教育林のブナ林を案内していただきました。

岳岱(ただい) 自然観察教育林

樹齢400年といわれる巨大なブナのある保護林で、遊歩道やトイレ、広い駐車場なども整備されていて入りやすい。また、近くには田代湿原がある。1992年(平成4)自然観察教育林として指定された。

川巡りの楽しみは、人と出会うこと。編集部のみなさんにも笹木さん、「ヘカヌーシ1ダ秋田」のみなさん、伊藤先生を紹介したい、と思って第2回は米代川に決めました。ぼく自身、再会を心待ちにして。

米代川の成り立ち

米代川流域の上流部には阿仁川のマガキ文化、秋田杉、鉱山などがあり、山からの恵みで流域全体が潤っていたと予想できます。109水系別ランキングの流域耕地面積率や流域人口密度が比較的低いことも、山がちな地形を物語ります。山が「山懐に抱かれた」という言葉を選びました。

米代川の源流、中岳のある奥羽山脈は、東北における日本列島の背骨。標高1000mから2000m級の山々が連なる火山帯です。南北に走る奥羽山脈の西側に、出羽丘陵が平行して並びます。

奥羽山脈と出羽丘陵が側面から大きな力を加えたことで、地層が曲がりくねるように隆起する現象が起こりました。米代川の上・中

坂本貴啓さん

さかもと たかあき

筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代にはJOC(Joint of College)を設立。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。河川市民団体の活動が河川環境改善に対する潜在力をどの程度持っているかについて研究中。



米代川

水系番号：21

都道府県：秋田県、青森県、岩手県

源流：中岳(標高1024m)

河口：能代港(日本海)

本川流路延長：136km 27位/109

支川数：89河川 43位/109

流域面積：4100km² 14位/109

流域耕地面積率：7.7% 66位/109

流域年平均降水量：1840mm 57位/109

基本高水流量：9200m³/s 29位/109

河口の基本高水流量：10059m³/s 36位/109

流域内人口：28万人 40位/109

流域人口密度：57人/km² 91位/109

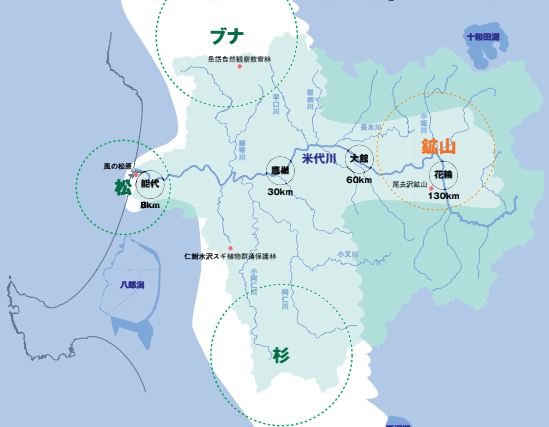
(基本高水流量観測地点：二ツ井)

河口換算の基本高水流量 = 流域面積 × 比流量(基本高水流量 ÷ 基準点の集水面積)
データ出典：『河川便覧、2002』(国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面)

※ 44号~46号の訂正：水系本川流路延長順位に誤りがありました。遠賀川は81位から82位へ、米代川は26位から27位へ、旭川は23位から24位へ訂正しました。



国土交通省国土数値情報「行政区域データ（平成25年）、河川データ（平成19年）、流域メッシュデータ（平成21年）、ダムデータ（平成17年）」をもとに編集部で作図



米代川を模式図にすると

伊藤徳治さんは、「米代川の流域を、頭を日本海側に向けたイヌワシの姿に思い浮かべてみてください。背骨に当たるのが米代川で上流から花輪、大館、鷹巣という三つの盆地と河口部に能代平野があり、上流の北に十和田湖、南に田沢湖、下流の南に八郎湯があります。背骨より北がブナ林地帯で南が秋田杉地帯です」と説明してくれました。模式図にすると覚えやすいですね。

八郎太郎伝説と三湖物語

花輪・大館・鷹巣という三つの盆地と、十和田湖・田沢湖・八郎湯という三つの湖には、八郎太郎伝説があります。

捕まえた3匹のイヌワシを一人で食べた八郎太郎は、どの湯きをやすため水を飲んでいるうちに龍に変身。流れを堰き止めて住み着いた所が十和田湖。湖の先住者と居住権をかけて闘うが、負けて大湯川を下る。鷹巣盆地の出口である七座山（ななくらやま）付近で米代川を堰き止めて住み着くが、ここでも天神様に負け追い出されてしまう。

米代川が浅過ぎて出て行くことができないので、神の使いの白鼠が堤に穴を開けて決壊させ、再び下流に流れていき、河口付近に八郎湯をつくって住み着く。田沢湖の主である辰子姫と恋に落ちるのだが、冬の間、八郎湯が凍っても田沢湖が凍らないのは、八郎太郎が辰子姫の所に通っている不在だから、という話。

この伝説は、流域の生い立ちや盆地の形成過程を、大洪水と関連づけて象徴的に伝えています。八郎太郎が米代川の狭窄部を堰き止めて湖としたことなどは、洪水の記憶としてわかりやすいもので、白鼠が穴を開けて堤を決壊させ、八郎太郎が下流に流されていった話も土石流の記憶のように思えます。

5万5000年も前から大噴火を繰り返してきた十和田火山は、915年（延喜15）にも大噴火を起こしています。このときの噴火の火山灰は十和田湖の西側に流れ、米代川流域を覆い尽くし大災害をもたらしました。人々はそのことを、三湖伝説として残したと考えられます。

埋め立てられて干拓地になった八郎湯を思うとき、さしずめ主の八郎太郎が辰子姫のいる田沢湖に住み着いてしまったから干上がったのだ、という風に考えることもできますね。

川巡りのスタートとなった八幡平で最初に見えてきたのは、松尾鉱山跡。標高1000mにあったため福利厚生施設を充実させて労働者を確保。大規模な廃墟が多く残る。後生掛温泉などの火山帯特有の温泉が多く湧出している。



史跡 尾去沢（おさりざわ）鉱山をご案内いただいた関村秀穂さん。「鉱山労働者はじん肺になって平均寿命が30歳ほどだったそうです」日本の近代化を支えた鉱山の厳しさを実感する話だ。鉱山では精練用の木炭や坑道をつくるための坑木のために、大量の木材を必要とした。坑木や炭材用の山林所有を巡って、南部藩と秋田藩では争いが絶えなかったそう。見学で中に入ると、真夏でも相当寒い。上着のない人は、入口でレインコートを手するといひ。



今回の旅は、標高1613mの八幡平からスタートしました。アスピーテラインを通れば車で山頂付近まで行くことができますが、アスピーテという支流ではありませんがアスピーテという源流の一つです。アスピーテというのは楯のことです。八幡平の形状から楯状火山と分類されて命名されました。しかし、ドイツの火山研究者 カール・シュナイダーによる火山分類は、火山を地形から見て分類するものだったため正確さに欠け、現在は使われないのさそうです。八幡平も実際は楯状火山ではなく成層火山（富士山と同様、一つの噴火口から成立）で、現在では「侵食や爆発によってなだらかになった」とい

流部が山がちで、たくさんの滝を抱えているのはこうした造山活動の結果です。こうしてできた隆起帯を米代川が横断。隆起帯を抜ける出口部分は狭窄部になっていて、大洪水のときに水が滞るので土砂が堆積します。それでまず湖ができ、徐々に盆地になったのが、花輪、大館、鷹巣という三つの盆地の成り立ちといわれます。主に東から西へ流れる川は東北地方では米代川と阿賀野川だけ。意外と珍しいんです。

八幡平からスタート



1段目左から：大湯川の支流をまたぐ用水路を発見。車を降りて歩くと、さまざまなもの・人に出会う／白萩平ふれあい牧場で流域界に思いを馳せる。2段目左から：米代川上流の湯瀬ホテル。本館と別館を川をまたいで橋がつなぐ／日本の滝百選の七滝は落差約60m。かつて小坂鉱山の煙害により緑が失われたが、自然再生に成功。3段目左から：湯瀬渓谷を歩いていたら取水口（写真右端）を発見／滔々と流れる用水路。最下段左から：用水路の水は三菱マテリアル碓（いかり）発電所で使われる水だった／流域には滝が多く、小規模な水力発電所がそこかしこに。



山の恵み 1 水力・地熱発電

山間を車で走っていて気づいたのは、とにかく滝が多いこと。それらのあちらこちらで小規模な水力発電が行なわれていました。

史跡 尾去沢鉱山の関村さんによると、尾去沢鉱山を経営していた三菱マテリアルの水力発電事業の歴史は古く、1898年（明治31）に米代川水系の熊沢川に永田発電所、1907年（明治40）に米代川に碓発電所を建設・運転開始し、尾去沢鉱山の動力用電力を供給していました。これにより、鉱山住宅を含む全山に電気が通ったということです。

さらに大正時代には大湯発電所、昭和時代に森吉町米代川水系小又川へ4カ所の発電所と森吉ダムを建設、自家発電設備の増強を図り、余剰電力は秋田製錬所に供給をしていましたが、閉山を機に電力会社へ売電しています。

地下資源開発で培った調査技術を活かし、地熱開発・利用も進めているそうで、秋田県鹿角市八幡平地区に2カ所の地熱発電所を稼働させています。

山の恵み 2 鉱山

米代川流域には江戸時代はおろか、奈良時代にまで遡る鉱山が多く存在します。尾去沢鉱山は708年（和銅元）に発見され、東大寺の大仏や中尊寺にも用いられたという伝説が残っています。

閉山跡地は土木学会選奨土木遺産や近代化産業遺産に選ばれ、1982年（昭和57）に前身のメインランド尾去沢としてオープンし、2008年（平成20）には史跡 尾去沢鉱山としてリニューアルオープンしています。ゼミ合宿のときも鉱山案内の方がくわしくガイドしてくださったのですが、今回もお願いすることができました。

尾去沢鉱山では金も採れましたが、のちに銅鉱が発見され、別子銅山（愛媛県）、阿仁銅山（秋田県）と並び、日本の主力銅山のひとつとなったそうです。

南部藩によって経営されてきた尾去沢鉱山は、廃藩置県後に借財処理にからんで南部藩から数人の経営者を経て1889年（明治22）に三菱財閥の岩崎家の所有になりました。以降、日本の近代化、戦後復興の礎となった尾去沢鉱山ですが、銅鉱石の枯渇と海外から安価な銅が輸入されるようになって不採算となり、1978年（昭和53）に閉山しました。

尾去沢鉱山は、断層の裂け目に鉱物が溶け込んだマグマが噴出したために、細い鉱脈が地表近くで冷え固まった鉱脈型鉱床の典型で、その部分だけを効率よく掘るために、シュリンケージ採掘法（天井の岩盤に開けた穴にダイナマイトを仕掛けて爆破。崩した鉱石を土台にして天井の爆破、削岩を繰り返し、一定の高さと幅を崩して鉱石を運び出す）という手法が取られました。

坑内見学では幅1mほどの採掘跡が天井に向かって伸びていて30mの高さがあるそうです。暗闇ですから30mの全容さえ見ることができないのですが、これが縦方向に15層も続いているというのですからビックリしました。

鉱脈は500条あり、南北3km、東西2kmの山中に800kmの坑道が縦横に掘られました。閉山後の現在も、鉱物が地下水を汚染しないように、処理してから流されています。



う説が有力です。周辺には後生掛（鹿角市）などの強酸性の硫黄泉があつて、火山帯らしい景観を見ることが出来ます。

何も無いけど、流域界

川巡りのときに源流と河口へ行くのは必須。流域では必ず流域界を探します。流域界というのは、流域と流域の境で、水の行方を分けている地点のこと。

分水嶺という言葉はよく聞くと、思いますが、高い嶺だけでなく、ほぼ平坦な場所が流域界のこともあります。

日本海側に流れる米代川と、太平洋側に流れる馬淵川の流域界は、青森県三戸郡田子町の白萩平ふれあい牧場の東端にありました。上りからわずかに下りに転じる箇所があり、意識しないと通り過ぎてしまうような所です。

流域界に行っても、何も無いんですよ。普段は別に水が流れているわけでもないです。しかし、雨が降り始めれば、ここが日本海と太平洋に水を分ける地点になるのです。ここが川のスタート地点の一つと思うと、厳肅な気持ちになります。

う説が有力です。周辺には後生掛（鹿角市）などの強酸性の硫黄泉があつて、火山帯らしい景観を見ることが出来ます。

何も無いけど、流域界

川巡りのときに源流と河口へ行くのは必須。流域では必ず流域界を探します。流域界というのは、流域と流域の境で、水の行方を分けている地点のこと。

分水嶺という言葉はよく聞くと、思いますが、高い嶺だけでなく、ほぼ平坦な場所が流域界のこともあります。

日本海側に流れる米代川と、太平洋側に流れる馬淵川の流域界は、青森県三戸郡田子町の白萩平ふれあい牧場の東端にありました。上りからわずかに下りに転じる箇所があり、意識しないと通り過ぎてしまうような所です。

流域界に行っても、何も無いんですよ。普段は別に水が流れているわけでもないです。しかし、雨が降り始めれば、ここが日本海と太平洋に水を分ける地点になるのです。ここが川のスタート地点の一つと思うと、厳肅な気持ちになります。



上中：てっぺんが尖っているのが植林で丸いのが天然秋田杉。右側3枚：仁鮎水沢スギ植物群落保護林をご案内いただいた伊藤徳治さん。大きな藁の葉でコップをつくり、湧き水を飲んでみた。左上・中：秋田杉の製材所。高度経済成長期までは、人の背丈ほどの大径木がたくさん出荷されていたが、今は稀少品。下：米代川水系サクラマス協議会会長の湊屋啓二さん。秋田県は日本有数のサクラマス大河川3水系・米代川、雄物川、子吉川を擁している。



山の恵み 3 秋田杉

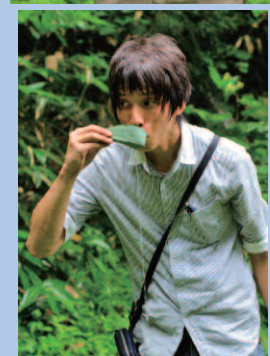
秋田杉のてっぺんを見てブロッコリーのようにこんもりと丸いのが天然杉。尖っているのは植林した人工林、と伊藤徳治さんに教えていただきました。丸くなっているのは高さ方向の生長が終了している印。あとは太るだけ、ということです。

「藩主が秋田氏だった時代、豊田秀吉が伏見城を築くのに建材用の良材を全国調査した結果、秋田杉に白羽の矢が立ちました。その後、鉱山の活用と豊富な森林資源の開発に本腰を入れたのは、裕福な常陸の国から貧しい未開の地に左遷させられた佐竹義宣です。なかでも長木沢（大館市）は米代川上流随一の美林といわれ、この杉材は海路で敦賀に輸送され、大坂市場へ大量に運ばれて藩財政を潤しました」

と伊藤さん。藩のもう一つの柱である鉱山が盛えるにつれ、山の木も切り尽くされるようになったそうです。しかし秋田杉の伐採に拍車をかけたのは、何と言っても江戸の大火だそうで、復興のため膨大な秋田杉が伐られました。

出羽久保田藩第9代藩主 佐竹義和（よしまさ）による文化の改革で植林が進められましたが、明治維新や第二次大戦など、杉林は何度も荒廃します。

能代市・ニツ井町にある七座（ななくら）山は七つの峰を持った連山で、七座神社上流で阿仁川が、七座山北方で藤琴川が米代川に合流しています。昔から修行の場として信仰を集めたこと、秋田藩の留山として枝1本取っても首が飛ぶほどの厳しいお咎めがあったことから、天然秋田杉の良木が今でも残っています。奥山でなく、里近くに天然秋田杉が残っているのは、奇跡的なことだそうです。



人物からみる米代川

この流域をこよなく愛した人物を3人上げるとしたら、米代川流域の恵みを享受して生きた狩人であるマタギ、米代川流域の新田開発を進め、暮らしを豊かにしていくために川を治めた佐竹家の家老梅津政景、紀行家の菅江真澄を思い浮かべます。

三者三様ですが、ぼくの視点は菅江真澄に近いですね。川を見て純粹に感動を覚え、この湧き上がってくる感動を誰かに伝えたい。そう思う瞬間があります。時間を超えてこの三者で米代川流域の川談義をしたら、ぼくも是非加えてほしいものです。

河口は 流域の富を映し出す鏡

流域の奥座敷に眠った資源を川を通して運び出すため、河口には流域の一番良いものが集まります。いわば河口は流域の富を映し出す鏡といったところでしょうか。

米代川より南にある雄物川と子吉川の舟運は米が中心でしたが、米代川は木材と鉱石をたくさん運びました。宮村忠先生の本の一節を借りると、能代港は海の港というよりも川の港という性質が強か

ったようです。

米代川の河口には木材産業の会社や古くからの立派な屋敷が多く見られることから、流域の富の集積場所だったことが窺われます。川に行つて何を見ているか迷つたら、河口に行つてみるといいかもしれませんね。

能代港は1611年（慶長16）に佐竹義宣によって林木受勘定所が設置されて以来、日本海の要港として北前船による交易が盛んになりました。

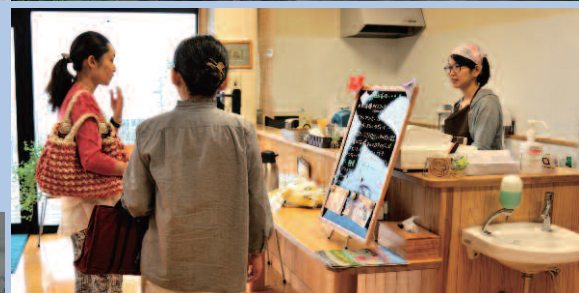
明治維新後も秋田杉の輸送拠点として発展しましたが、土砂の堆積が進み、一時期は停滞していたとか。戦後、港の整備が進められ重要港湾に指定されました。

河口部に拓けた能代平野には、日本最大の規模を誇る松林（風の松原）が広がっています。幅1km、総延長14km、面積約760haに700万本の松が植えられています。土砂の堆積は港としては頭の痛い問題で、江戸時代から松がこれだけ植林されてきたのも防砂・防風のためです。

現在の河口部は土砂の堆積で狭まっており、「昔はこうではなかった」と、米代川水系サクラマス協議会会長の湊屋啓二さんは言っていました。



上：すべて現地で調達した岩石や土砂を積み上げてつくられた堤体。2段目左から：森吉山ダム余水吐き。囲った壁に穴をつくり、オーバーフローした水が常に流れ出す仕組み／森吉山ダム管理支所長の館山悟さん／この日は放水が行なわれていた。最下段左2枚：ダムが完成して不要になったトンネルは、バルブ室と発電機室に利用。地下からパイプラインで、最大20m/sの水が東北電力に送られる。右2枚：〈根森田生産組合〉が、森吉山ダム広報館でカフェを開いている。お勧めメニューの秋田名物〈バター餅〉と水出しコーヒーをご馳走になった。



森吉山ダムとモリトピア

〈モリトピア選書〉というシリーズの本があります。ダム湖に沈んだ小又川流域の人の暮らしや歴史、自然など、地域の文化を幅広く記録した郷土図書で、前回訪問したときに分けていただいたのですが、内容の濃さにびっくりしました。

森吉山ダム工事事務所（国土交通省東北地方整備局）時代につくられた森吉山ダム管理支所（国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所）支所長の館山悟さんにかがいました。

実は館山さん、ここには3度目の赴任。工事事務所時代から、ずっと森吉山ダムを見てきた人です。「どの地域にも、地域独自の生活文化があります。祭りや食べもの、人の暮らしの営みは、ダムをつくることで水没して失われてしまいます。それを本という形で、少しでも残せないかと考えました。それができたのも、その地区をずっと写真に撮り続けた人、昔からの言い伝えを伝承してくてくれた人がいたお蔭。たくさんの方の協力でなし得た記録です」

ほくが知らないだけかもしれませんが、これだけの記録集を工事事務所がつくったというのは、ほかに例がないのではないのでしょうか。

森吉山ダムは、1972年（昭和47）の梅雨豪雨で大きな水害が起きたことがきっかけで計画されました。

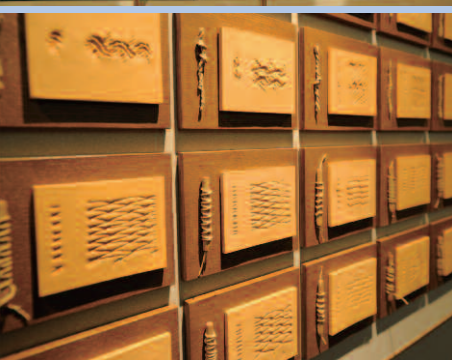
梅雨前線の停滞により、米代川流域の2日雨量は多い所で568mmを記録、未曾有の大雨だったそうです。米代川と藤琴川の合流点付近にあたる二ツ井地区の右岸堤が1380mにわたって越流し、二ツ井町の大部分が浸水したほか、能代市中川原も大きな被害を受けました。

翌1973年（昭和48）に、米代川の支流小又川に阿仁川ダム調査事務所（最初は河川名から阿仁川ダムという名称でしたが、地元町の要望で、地域の象徴的な山である森吉山に因んで森吉山ダムに改名）を開設して実施計画・調査を開始、2002年（平成14）にはダム本体工事に着手し、昨年2012年（平成24）完成しました。

「森吉山ダムは、完成までに実に39年もかかっています。同じ時期に計画された玉川ダムは十数年でできていますから、大変な時間がかかったことがわかりただけだと思います」

と館山さん。

米代川は強く蛇行し、以前は流れが定まらない川だったそうです。大きな狭窄部の上流にできた盆地（花輪・大館・鷹巣）は、大雨が降ると天然のダムのようになるのです。



原始の文明が生まれる場所

大湯環状列石は紀元前2000年の遺跡で、サークル状に石を並べて、時を刻む日時計がつけられていたといわれます。イギリスのストーンヘッジの日時計と変わらない時代と推定され、日本列島にも古くから高度な文明が芽えていたことがわかります。

石は大湯川の支流、東約7kmにある安久谷（あくや）川のもので、水流で磨かれた形のきれいな石を秋の内に選んでおき、雪が積もってからソリを使って運んだといわれています。四大文明は川から発達したことは有名ですが、日本列島の小さな川からも、文明はしっかりと芽生えていたんですね。

大湯環状列石に使われている石は、なんと7000個。200kgにもなる重い石もあり、そのほとんどが石英閃緑ひん岩（せきえいせんりょくひんがん）です。

雪融け水の増える春先と、稲刈りの台風シーズンには、特に大きな被害をもたらしてきました。しかし同時に、下流域は渇水にも悩まされてきました。そのため、森吉山ダムは洪水調節だけでなく、多目的ダムになっています。麓から車で森吉山ダムにアプローチすると、優美なカーブを描いた長さ786mの堤体が見えてきます。誰でも歩くことができるように開放された堤体の上を、館山さんにご案内いただきました。786mの堤体の長さは「行こうかどうか悩む（786）」と語呂合わせして覚えるのだそうです。形式はロックフィルダムで、岩石や土砂を積み上げて建設しますが、材料はすべて現地で調達したということです。

感心したのは、洪水吐。常に開放されるようになっていきます。随意的に操作するのではなく、自然に放流されるようになっていきます。感心したのは、洪水吐。常に開放されるようになっていきます。随意的に操作するのではなく、自然に放流されるようになっていきます。

森吉山ダム広報館、愛称「モリトピア」は2002年（平成14）から2007年（平成19）までの5年間で20万人の来館者数を達成しています。まちなかの河川学習館でも年間1万〜2万人来れば上々と

山の恵み 4 白神山地

1993年（平成5）に日本で初めてのユネスコ世界遺産（自然遺産）に登録された白神山地は、青森県の南西部から秋田県北西部にかけて広がっていて、面積の26%が実は秋田県。

地盤が弱く、崖崩れが多発する白神山地は、林道をつくっても不通になってしまうため、結果的に広大なブナの原生林が残されて世界遺産に登録されることになったそうです。木材の価値からいえば低価格のブナが世界遺産に選ばれ、銘木扱いの天然秋田杉が資源枯渇に追い込まれているのですから、皮肉なものですね。

米代川は東北で5番目に大きい川（幹線流路延長、流域面積ともに）なのに、なぜか全国的にはあまり知られていない川です。白神山地にしても26%が秋田県なのに知名度が低いのです。あまり主張せず、控えめなところが秋田らしさなのかもしれません。

雪融け水の増える春先と、稲刈りの台風シーズンには、特に大きな被害をもたらしてきました。しかし同時に、下流域は渇水にも悩まされてきました。そのため、森吉山ダムは洪水調節だけでなく、多目的ダムになっています。麓から車で森吉山ダムにアプローチすると、優美なカーブを描いた長さ786mの堤体が見えてきます。誰でも歩くことができるように開放された堤体の上を、館山さんにご案内いただきました。786mの堤体の長さは「行こうかどうか悩む（786）」と語呂合わせして覚えるのだそうです。形式はロックフィルダムで、岩石や土砂を積み上げて建設しますが、材料はすべて現地で調達したということです。

然に調整できる仕組みです。またダム軸が、やや曲がった形になっているのは、風化しやすい軟質岩をコア敷き（水を遮る芯の部分）から避けたため。ロック敷き（ダムとしての重畳、強度を稼ぐ部分）は軟質岩を除去せずに、風化防止対策を施して利用しているそうです。堤体下には、ダム工事中に川の水を流すために掘られたトンネルが2本残されています。ダムが完成して不要になったトンネルは、バルブ室と発電機室に利用されています。最大20m³/sが東北電力に、13m³/sが自家発電用（河川維持流量と同量）に使われています。「ダムというのは今でも進化し続けているんですよ。技術だけでなく、コストダウンのための工夫や環境への配慮なども同様です」館山さんは、その理解を深めるためにも現地に来て見てもらいたい、と言っていました。



右ページ上から：きみまち阪の上から、二ツ井の狭窄部を見学。米代川が抱えるようにしているのが七座（ななくら）連山／大湯環状列石には、大量の石英閃緑ひん岩でサークルがつけられていた／縄文式土器／土器につける文様のもとになった縄目。

左ページ上段左から：カヌーシダ秋田のみなさんの手づくりカヌー／米代川に漕ぎ出せずにガッカリするメンバー。2段目左から：手づくりの救命ボートも用意されている。／コーディネーターとしてご尽力いただいた笹木綱彦さん／カヌーシダ秋田会長の小林勉さん／二ツ井町観光協会会長の成田正文さん／伊藤徳治さんの足下にひたひたと増水する米代川の水。

最下段左：カヌーシダ秋田の小林会長が、つくり方を実演。板と板を合わせる部分の加工を見せてくれた。最下段右：上流に降った雨が、泥流となって時間差で二ツ井に到達。



表情を一変させる川を知る

今年の梅雨明けは、関東甲信地方が7月6日ごろとかなり早かったのですが、東北地方北部では逆に8月10日ごろとかなり遅くなりました。

川を水面から眺めよう、ということ、前回同様（カヌーシダ秋田）と二ツ井町観光協会のカヌー工房のみなさんが、ぼくたちの到着を手ぐすね引いて待っていてくれました。ところが上流の大館市では夜半から雷鳴が轟く大雨。上流にいるぼくたちは「とてもカヌーは無理だ」と思っていました。二ツ井には雨も降っていない、川の水も変わりないので、漕ぎ出して試走したりしていたそうです。ところが上流に降った雨

が時間差で二ツ井に到達。泥流とともに流木や河川敷に捨ててあった家電機器などもどんどん流されてきて、事の重大さを悟ったそうです。

前夜の懇親会で盛り上がっただけに、残念無念。カヌーに乗りにもたれることを約束して、お別れしました。

午前7時5分に出された注意体制は9時10分には警戒体制に、その後11時50分には非常体制にまでなりました。こんな川の光景を目にしたのは、初めてです。日頃なかなか気づくことはありませんが、非常時には、見えないところで対策に当たっている人たちがいる、ということがよくわかった経験でした。水害を治めることの難しさを実感した川巡りとなりました。

ブナ林をご案内いただく予定だった伊藤徳治さんには、雨で道路が分断された岳岱自然観察教育林の代わりに、仁鮎水沢（にのみずさわ）スギ植物群落保護林に連れて行っていただきました。

イヌワシ（米代川）は、ぼくたちに左翼（秋田杉）だけで右翼（白神山地）を見せてくれませんでした。右翼を見て、川から川を眺めるために、米代川を是非再訪したいと思います。

取材：2013年8月7～10日

